

農業土木を支えてきた人々

農業水利の偉業者大畑才蔵

阪 口

宏*

和歌山県は山地がその大部分を占める「木の国」であるが、きわめて早くから農耕文化が発達していたらしい。

したがって、土地改良事業の歴史も古く、タメ池や水路の構築等についての伝説がいたる所に残されているが、近世には、紀州家の歴代藩主が勸農に意を用い、新田の開墾、水利の改良奨励した事績も数多くあり、これらの中で県内北部、すなわち紀北地帯の農業水利事業に大いに貢献された始祖、「大畑才蔵」氏は県の土地改良事業の先覚者の第一人者であろう。今でも古老たちは、才蔵の不滅の業績をたたえている。ここに過去の貴重な記録や、日記等の資料により、才蔵の偉業をしのびたい。

国鉄和歌山線で和歌山駅から約40分、粉河駅下車、徒歩で北方へ約10分ばかり行くと、西国三十三番の札所、有名な粉河寺に突きあたる。大門をくぐり、中門にいたるまで、石畳の参道をすすむと途中に大きな仙台石の石碑が建てられている。碑の高さは地上から約5mもあろうか。

碑文には、

「紀北の地 長梁十里、二条竝行して西に走るあり、一を小田井といひ、一を藤崎井とす伊都那賀海草三郡の沃野、由を以て潤をうけ、十万の蒼生由を以て沢に浴す。是れ両ながら大畑才蔵の開墾せし所に係る（中略）、元禄9年3月、紀藩に召されて司農の府に仕ふ、時に歳五十五、是ノ歳、工を藤崎井に起し、後十有一年にして宝永4年工を小田に起せり、（中略）以来二百数十年地方其恵沢に霑ひ、功無窮に垂ると雖も、世多くは其の然る所此を知らず、今にして顕彰の途を講ぜずむば或は怕る後也事蹟湮滅して口碑にだも上らざるに至らずことを（下略）」とある。

この碑は大正14年（1925）12月の建立で、顕額は当時の県知事長谷川久一（のちの警視總監）、撰文ならびに書は、那賀郡長西本文四郎となっている。碑文にもあるように小田井、藤崎井を開さくした功績をたたえて、紀

の川沿岸10万の関係農民が建立したものである。

裏面には50名近い関係者の氏名が刻まれているが、農民の代表者で、その後10年おきに近郷の農民代表らが集まって祭典を催している。

才蔵の祖先は、日高郡亀山城主（現在の御坊市丸山）湯川民部輔直光の末えい、湯川次郎右衛門信光といい、天文2年（1533）2月、生地石見守に仕えていたが、石見守が熊野から伊都郡学文路（現在橋本市学文路）へ転封した際、一緒に随行して学文路に住居を構え、姓を大畑と改めて代々ここに居住し、庄屋役をつとめた。次郎右衛門から5代目を才蔵勝善といい、この碑の主人公である。

才蔵は寛永19年（1642）第4代与左門尹光の子として生れた。父が寛永4年（1664）6月に庄屋役を辞任したので、そのあとをうけて、郡奉行から庄屋役を仰せ付けられ、郡方の御用をも兼ねて勤めるよう命ぜられた。このとき才蔵は23才の青年であった。役に就いて粉骨碎身、献身的に勤めたので、村民からも信望が厚く、また上司の信頼も厚かった。

元禄9年（1696）3月、藩からお召しがあり、平常は

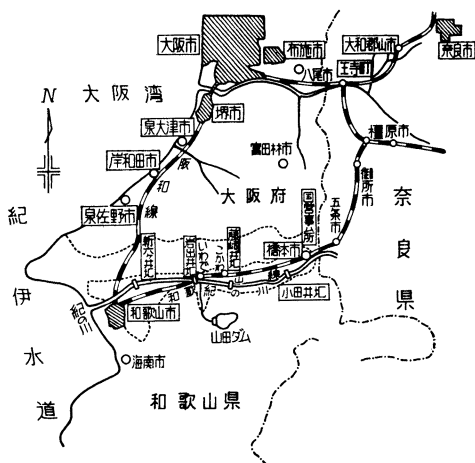


図-1 地域略図

* 和歌山県農林部耕地課（さかぐち ひろし）

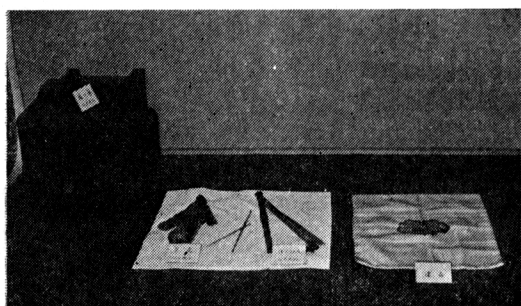


写真-1 測量道具

村で庄屋を勤めながら、御用の節は出府を命ぜられる準分士格にとり立てられた。

このときから、出扶三人扶持、年々銀10枚を給せられることになった。才藏55才の時のことである。これによって一庄屋の才藏は、藩の中央の業務に参画することになった。手腕、力量、徳望は十分認められておりながら、当時は封建的階級制度の厳格なる時代であったので、家柄などとくにうるさく云々され、なかなか頭要の地位につくことが許されなかった。しかし、学文路村の一農民が紀州藩の士分となったことは破格の出世であると羨望されたものである。才藏もこれを栄光の至りと考え、終生、御勘定並五人扶持という小禄に止まったが、常に精励格勤1日も怠ることがなかったという。元禄10年に藤崎井開さくの藩命を受け、足かけ4年ののち同13年(1700)に完成している。

藤崎井というのは、那賀郡那賀町藤崎で、紀の川にえん堤を築き、その右岸に取水口をつくり、那賀町、粉河町、打田町、岩出町を経て、和歌山市山口(旧海草郡山口村)一帯にいたる全長23,500m、10,500ha、その後、昭和49年にさらに県営事業で、新設し路線延長され、直川まで工事を行い、現在は市内千津川において落水されている。この石ゼキが造られる前には、この付近は、水田が少なくほとんど畑であった。才藏の手によって造られた幹線水路により、続々と畑地が水田化され、毎年干バツに悩まされていた農民にとって大きな福音となった。

元禄14年(1701)3月から4月にかけて、御大番頭格大島伴六に随行して、三重県勢州視察を、引続き、8月から年末にかけて110日間、再度出張。このように出張の多かったのは、才藏の設計で一志郡に完工した新井堰の開さく、上仁柿村の新道開設、山原新田開拓などの大事業のあと始末やその後の状況視察のためであろう。元禄15年(1702)11月、常扶持二人扶持を増増されて五人扶持となった。また宝永3年(1706)11月、藩の水利土木振興のため精励したとのおほめにあずかり、学文路で

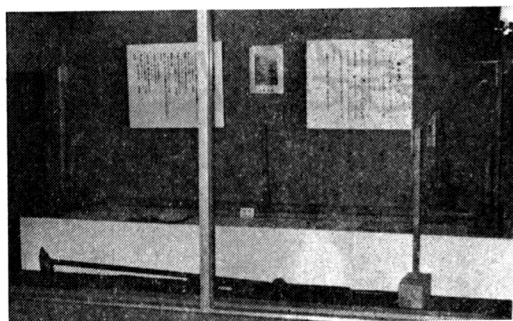


写真-2 水盛り入用の道具(上)

新田1町2反(120アール)余を賜った。その翌年宝永4年(1707)才藏畢生の大事業である小田井開さくの藩命を受けたのである。

この平地は北高南低に傾斜しており、紀の川も自然にこの平地の南部を西流し、右岸一帯はゆるやかな段丘状をなしている。そのため、昔は水利の便は悪く、山ろくにかけて多数の池沼を築造しているが、干害に苦しむことが多く、俗に「月夜に旱ける」といわれたもので、水稻栽培に難渋し、畑作に頼る地域が多かった。

第5代藩主頼方公(のちの将軍吉宗)は明君の誉れ高く、国利民福に力を注ぎ、大島伴六、浅井忠兵衛らの明吏を司農府の要職につかせて地方財政を確立し、また、藩庫を豊かにするため、人材を多く登用し、水利、土木、開拓など積極的に農政の振興をはかった時代である。才藏は元禄9年から10年間、常に藩内各地を検分し、水利、民情を調査し、とくに紀の川右岸の水利状況を深く研究し、ここに一大水路を開さくする必要を痛感して、藩に対しても建議したものと思われる。小田井の開さくにあたっては、身命をかけ驚くべき短時日にこの大事業を遂行し成功したのである。

小田井は小田村(現在伊都郡高野口町小田)の紀の川にえん堤を築き、その右岸から取水して、5000分の1のヨウ配を保ちながら、現在の高野口町、かつらぎ町高田に達し、四十八瀬川を渡井を以て越え(龍の渡井という)那賀郡那賀町名手市場に達するもので、その間の20km余を完成した。これが小田井の第一期工事で、区域を25工区に分割し、それぞれ一斉に工事を行い、人夫を費すこと延10万人であった。

工事は地勢の高低に応じて、山ろくのう回、溪谷の横切り、サイホン式の採用、^{カケヒ}覧を通じて川を渡すなど難工事の連続で、ことに四十八瀬川の渡井は兩岸の岩盤を巧みに利用して30mの間、1本の支柱もなく渡され、才藏の最も苦心したものと考えられ、今さらながらその合理的設計の妙に驚歎する外はない。宝永6年(1709)第二

期工事の藩命を受けることとなったが、「才蔵日記」…（県指定文化財）によれば、「正月27日夕より5月13日朝迄、伊都新井堀次御用（内1日休息）打田、市場、東野村、背山村……」とあるのを見ると、この期間に完成したものであろう。しかもこの長い間に「1日休息」とあるが、わずか1日の休暇をとっただけで、連日連夜、泊りがけで工事督励に当たったもので、才蔵の決意のほどがうかがわれる。当時は精巧な測量器や、掘削機もなく、手製の竹筒で作った水準器や竹竿、木片などを使用し、暗夜に、たいまつを焚き、提灯を掲げて目印として測量し、唐鍬、鍬、玄翁などをもって掘削を続けたものである。

これは物品購入の手記から判断しうることである。第二期の工事経費は、銀26貫900匁で、使役された人夫は、23,000人余となっている。水路は現在的那賀町から打田町にまで及び、カンガイ面積は増大し、第一期工事の効果はここではじめて、真価を発揮することになった。現在の小田井は打田町から岩出町根来（新義真言宗根来寺の南方のところ）で、これは第三期工事とみるべきであるが、才蔵が関係したことは真実のようであるが判然としない。いずれにしても才蔵の計画、実績を参考として進められたことは間違いない。

元禄9年から紀藩に召出され20年1日のごとく、献身奉公の誠をつくして来た才蔵も、もはや70才を越え、老令激務に耐えることができない理由により、御役御免を願ひ出たのが正徳5年（1715）3月のことである。その後隠居の身となったが、今までの功績を認められ、終生

五人扶持を下されることとなった。その後いくばくもなく享保5年（1720）9月、79才で生涯を閉じたのである。今も子孫が橋本市賢堂三軒茶屋に住んでおられ、才蔵の残した文書は「才蔵日記」…（公務日誌）をはじめ八十余点にのぼり今なお所蔵されており前述の使用された測量道具一式が、今でも郷土資料館に保存されている。

（写真 1.2 参照）

才蔵の人となりには、役人風を吹かさず一介の普請役の職に甘んじ、百姓とともに語り、ともに働き、苦勞とともにしながら、彼の信ずる、土木利水の道を一途に生き抜いた、高潔英知の人柄を、尊敬すべきであろう。

日記の余白に走り書きした徒然草の一節に、

「名利に使はれて志つかないといまなく、一生苦しむことおろかなれ……。位たかくやんなきしも、すぐれたる人とや云べき。おろかにつたなき人も、家に生れ時にあへは高き位にのぼり、おごりきわむるもあり、いみじかりし賢人、聖人、みづからいやしき位におり……」と書かれている。才蔵の深い心情が読取れる。

藤崎、小田の大事業を遂行した才蔵の両井は、干害のうれいもなく、紀の川沿岸の水田は、黄金の穂波がただよって、豊作が期待されている。

ここに改めて、和歌山県の農業土木の先覚者として、崇拜し筆をとめた。

資料文献

- 1) 和歌山県史、紀の川農業水利史、藤崎、小田雨井沿革史、その他による。

[1978. 10. 13. 受稿]